

## 視点1：全教職員で取組を推進するための組織運営

### 《取組内容》

#### ポイント1 取組の宣言と共有化

- 【手立て】・令和6年度「確かな学力育成プラン」にて育成を目指す資質・能力を設定。（研究主任）
- ・育成を目指す資質・能力を全教職員で共有し、各教科の特色を生かした指導の研鑽を積む。（全教職員）
  - ・育成を目指す資質・能力や取組を「まなびフェスト」で示し、全教職員・保護者で共有を図る。（校長）

#### ポイント2 組織的な取組の推進

- 【手立て】・学校として育成を目指す資質・能力が身に付いた生徒の姿を、各教科部会等において明確化。
- ・教務と連携し、どの教職員も参加できる「互見授業」を実施し、個々の教員の持つ授業スキルやツールを共有できる環境づくり。
  - ・校内研究会を通して、指導の方法について検証し、成果や改善点を全教職員で共有。
- 【成果】・保護者、全教職員で学校として育成を目指す資質・能力及び育成を目指す生徒の姿を明確にし、一貫した校内研究の推進を図ることができた。

《提言》  
 目指す生徒像を、保護者や全教職員で共有し、校内研究会等で研鑽を重ね、成果の共有、検証・改善を行う。

## 視点2：学年や教科を超えた組織的な授業改善の推進

### 《取組内容》

#### ポイント1 互見授業の実施

(1) 「個人の財産」を「質のよい共有財産」へ

**【手立て】**・教科毎に期間を設定し、誰でも参観可能とする。

**【成果】**・複数教員がいる強みを生かし、研究主題に迫る授業であるかを多方面から評価を受けることで、ブラッシュアップにつなげることができた。  
・教科外から生徒の情報を得ることができた。

(2) ICTの効果的活用方法の交流

**【手立て】**・生徒の実態や教科の特性、授業のねらいに合わせたICTの活用効果の検証を行う。

**【成果】**・ICTで振り返りをアーカイブすることで、生徒が学習の流れや成果・課題を時系列で確認可能になるなど、活用の幅を広げることができた。

#### ポイント2 発展的な自主学習の推進

**【手立て】**・各教科において身に付けさせたい力を明確にした学習内容と学習計画表、振り返りを連動させ、主体的な家庭学習を促す。

**【成果】**・生徒が自ら発展的な内容に取り組むなど、学びの自己調整力を高め、発展的な自主学習につなげることができた。

### 《提言》

2

各教科の授業と家庭学習を連動させ、発展的な自主学習や学びの自己調整力を高めることにつなげる。

1

教科を超えた授業の相互評価を行い、授業力の向上を図る。

## 視点3：調査結果の積極的活用

### 《取組内容》

#### ポイント1 諸調査結果の関連項目を比較分析

【手立て】・ 県学調の生徒質問の関連項目を比較し、結果に乖離が生じていないかを確認する。

「自己解決」しているに対し「具体的手段」を取っていない→「できているつもり」である可能性を示唆

#### 生徒の実態(諸調査の結果から)

##### 《できている》

・学習の振り返りを通して、学習内容で何が大切かが分かる。(R6 県学調 88%)  
・授業で分からなかったところを自己解決している。  
(R6 県学調 81%)

相互に矛盾

##### 《課題点》

・学校の宿題に加え、弱点の克服に向けて復習したり、発展的な問題に取り組んでいる。(R6 県学調 52%)  
・学校の宿題だけでなく、自主学習に取り組んでいる。  
(R6 県学調 55%)

#### ポイント2 生徒の自己評価と実際の成績の比較

【手立て】・ 定期的な学校独自学習アンケートにより「育成を目指す資質・能力の習得状況」を確認する。  
・ アンケート結果と実力テスト結果を比較し、できている「つもり」ではなく「確実な定着」となっているかを確認する。

【成果】・ 関連項目の比較、アンケート結果と実力テスト結果分析から、生徒理解が深まり、授業改善や学習手段の評価、改善へのアドバイスを行うことができた。

### 《提言》

諸調査結果は関連項目との比較を行い、正確な現状を分析し、授業改善や生徒の正しいメタ認知につなげる。